

世界に僕ら

想を

つなぐ

以生存

超越

人

かい

生存の超越 悦ばしき序文

ウロボロス

メビウスの輪に倣い、身を捻じりながら、自ら尾を咬む原蛇の環、を

モノクル

象った銀の飾りが嵌められた革紐は片眼鏡から垂れ、襟に留められている。そのレンズの奥で瞼を半ば閉じ、瞑想に耽りつつも、U字型に湾曲したキャラバツシュ・パイプを燻らし、独白のごとき深き声で語る、

「“小生”と称するモノ、つまり、これ。そう、これだ」

彼は自らを小生という一人称で呼ぶ。 “ が附されている訳は仮称であるというニュアンスを込めていて、それが本当にそれを怪しむ疑問符を附した効果を醸そうとしているからである。

それを語りながら、彼はその特定できない何かを、具体的に指し示そうとするように指を動かし、何を指しているかわからない動きで、途中まで指しかける。何を指しているかわからないその指先は竟に場所を特定できずに宙空で止まって、

「今まさに生き生きと活動しているこれ、むろん、これだ」

鼻の上を差そうとしてから、額へと矛先を変えようという動きを見せつつ、こめかみへ動くと見せて、終に諦めたか、ポケットに突っ込む。

「この意識作用、はた意識”という、これ。蛋白質の集合体に構築された

絡繰りから生まれる。それらが起こす現象だ。その“機^{はた}らき”の妙に因り、縁り結ばれる霞のような雲の表面に、刹那の間のみ顕れ、すぐに喪

われる薄い霓にじのような霞あやだ。

作用に少しでも狂いがあれば、異なる、又は消え失せてしまう。危ういもの。実体のない存在、儚い夢か幻。

小生であっても、小生ではなくなってしまう」

瞬時、Elegie のように眉を顰め、

イデア　ロゴス

「さよう、実体はない。本質は、理性が希求してやまない希望であるが、残念ながら、本質は非存在だ。生命とは何ぞや。非生命と非生命とが互いに反応して織りなす現象による、刹那の綾だ。いずれ、時が経てば、それも非生命に帰す。

蛋白質は２ーアミノ酸に構築される。アミノ酸も炭素に帰する有機化合

物である。有機的なものも、解析すれば、その本源は無機質へ帰すことがわかる。

さように炭素、アミノ酸を基とし、構築される蛋白質、その蛋白質の集合体。それらが構築する絡繰りの作用。

その作用の無数にあるうちのほんの一部が小生たち（現自我、現意識）であって、しかも、薄っぺらな、表面的なものでしかない。情念や思惟や感覚の真奥には、内臓やら脳髓やらの、さまざまな働きがある。小生たちはそれら本源から見れば些細な末端ですらもあり得ないほど、ささやかな存在だ。

つまり、生理現象や化学的現象などの波瀾に大いに揉まれ、左右され

ている。そうであるとしか見えない（さらに穿って考えるならば、そのようにしか見えないようになってゐる、そのように見せられてゐる、かもしれない）。

自分自身と言えるか、主体者などと言えるか、“自分”は、いったい、どこに在るのか、どれがそうなのか。

まあ、事実や経験によつて検証できないならば、有意味性はなく、つまり、無意味だ」

瞼を閉じた。眼を瞑つたまま、瞼の裏に何を観るのか、髭に埋もれた唇に、韜晦者のような、たはぶれせむとや生まれけむの微笑みを浮かべ、「それにしても、小生たちの見るものすべてが真実であるとすればね。

本当に客観的な実在を観察しているか。

そもそも、小生たちが対象と対峙して、観察しているという、主と客が向かい合っているという構図が実際に起こっているかどうかすらわからない。もしかしたら、違うことが起こっているかもしれない。自分の外に出て、自分の行為を観察することができないから、それを確認することはできない。

おっと、人は言うかもしれない、他者の所作を見ればよいではないか、と。例えば、誰かが岩と対峙し、『私は岩を見る』と言え、客観的な実在である岩を見て、岩という概念を人間が想起することがわかるではないか、と。

だが、他者の対峙構図を観察する小生自身の対峙構図は確認できていない。

他者が岩を観察しているということが自分の外で実際に起こっているかどうかはわからない。小生から出て、他者と岩が対峙する状況を小生が観察していることを確認しないことには」

キャラバツシュ（瓢箪の一種）は最初、黄色っぽいが、使ううちに煙草の「ジュース」が沁み、琥珀色、さらに深い色へと変じていくものだ。遊び、その風合いを愉しむ。それが楽しいなど、慣習に因る馴染みに基づく錯覚、思い込みでしかないが。

「小生たち、小生ら、と言うのは、やめにしよう。同じものを見て、同

じものを聞いているとは限らないから。

だが、事実がどうあれ、小生の眼に映っている。間違っているかもしれないぬとしても、ありのままではないかもしれないが、見えるままに於いて、そのように実存として映っている。映って、と言うよりは、構築（解釈）されていると言うべきかもしれないが、率直に言えば、映っている。

実はどれも同じ、ですらない。ましてや、差異などあるものかは。それはさて置き、とにもかくにも。

現に、実感として、“感覚（と称される何か、仮に“因を感受した結果の表象”と見做すモノ、又は表象の場）”に存するがゆえに、客観的にそれが在る、と小生は断ずる。実の快苦として切実にある、と。それ

がドクサ、思い込み、憶断だが、切実な実感としてある以上、実存的には正しい。

実際、そうでなくとも実感が痛切に存し、切実に迫真するのであるなら、現実存在という名を称する資格がある」

香り深き蒼き紫煙を味わった。

「だとすれば、個人とは、主体者とは、いったい、何か。

細胞たちか。細胞が集合して起こす現象の一面でしかない小生たちは、どのような立場なのか。

小生の意識は矛盾している。

なぜなら、小生の実感としては、今のこの意識こそが小生自身の全部、

個人の主体であって、他はないと考えているからだ。

しかしまた同時に、小生を物的に構築する蛋白質たちにとっては、小生のこの意識など、ほんの末端の一部の余剰の欠片の隅っこの一素粒子でしかないことも感じている。

彼らこそが本物の小生であって、小生が自分であると思ひ込んでいる考えや、感情や意欲や、好悪や嗜好、思惟や論理的な思考など、自分でもなく、自由さもなく、彼ら集合体こそが本源だと観ている。

小生は、ほんの一部どころか、百分の一、いや、千分の一パーセントですらない。いやいや、ただの操り人形であって、零パーセントだと知っている。

そしてまた、このことに於いて、反論の余地などまったくない、実際の事実として、科学的にも、明晰で判明なことだと確信せざるを得ないよう、解剖学的なさまざまな事象が、客観的な実在として、網膜や鼓膜、鼻腔や舌、皮膚などに映写されている。さように認識している。

たとえば、視覚は、網膜が光の反射を受け止めた結果、というふうに、小生の眼が他者の眼の構造を見て、晰かに確かめている。

この矛盾は、小生の眼がカメラのように（いや、カメラも光線の波長を定着させているだけに過ぎず、事実をありのままに写し取っている訳ではない）、事実を写し取っているだけと思っっている人にはさほど不思議に思われないかもしれない。

しかし、意識に泛び上がるもの、上映されているものは、小生によって、いや、諸々の細胞たちによって、恣意的に構築されたものである。

それなのになぜ、わざわざ矛盾するのか。

わからない。

矛盾だが、どうにもならない。どのような結論にもならない。それをそれとして、観取するしかない。

何も言えないままに」

煙をふつと吐く。

「諸々の細胞の機能によるさまざまな作用の集合、これは海だ。細胞の作用の総体を、地球の海に擬えるならば、小生たちのこの意識上に認識

されている思考と感情とは、大海の上の一枚の木の葉に過ぎない。

三億六千万平方キロメートルの面積と一万メートルを超える深さの表面にひらひらと浮かぶ小さな葉に過ぎない。

小生の身体、内臓や神経系、神経伝達物質、脳神経細胞や諸々の細胞の総体の意向である生存への意志のうちの、支流の亜流の傍流の、ほんの末端に過ぎない。総体の意向をナイルの大河とするならば、小生は小さな水溜りからあふれた細い流れの滞りの澱みですらない。

小生の頭在意識の源である、大脳や小脳や脳幹の深層から来る潜在意識の影響の下にある。そして、その更なる根源である、潜在意識の真奥の根幹中枢には、生存への意志がある。

だがしかし、この根源である潜在意識は平時においては、日常的に表層の顕在意識に抑圧されている。抑圧された無数の獸的な情念と欲望とがある。実は、それこそが人間の真の動機だ。それらは途轍もなく強い。その奥底に、生存への意志を礎としているからである。

そこには主な“自分”に抑圧された複数の他者である“自分”がいる。多重人格は否定的に捉えられることが多いが、小生が思うに、生きる者にとって、複数のキャラクターを持つことは当然のことのように思える。

たとえば、動物が危機に瀕して怒りのキャラクターに切り替わるように、本来、すべての生物は複数のキャラクターを持つ。そうでなければ

生き残れない。

人間も複数の人格で構築されるが、生き残りの戦略として社会的な生き物であることを選んだ都合上、ジキルとハイドのようになってしまうことは塩梅が悪く、まっとうな社会生活が送れないので、人格を無理矢理統合し、一貫性のある、扱い易いよう個の特性を持つキャラクターを形成する。

そして、顕在意識の上ではおすましという訳だ。

だが、顕在意識は潜在意識という大氷山の一角の尖端の一部分に過ぎない。社会的動物であるために、他人とのコミュニケーションが当たり障りなく済むように、自己内部で互いに矛盾する複数の人格を統一して

構築する、捏造の彫像に過ぎない。小生たちはその彫像が被る仮面を、さらに蔽うための薄皮に過ぎない。

だから、当然、総体の意向に逆らうことはできない。小生たちが死を超越できないのは、そのためである。死の淵で混乱し、命の危機の前で動揺を制御できないのはそのためである。生存への意志には逆らえない。すべては自然が与えた刹那の現象であり、自然が与えた“理解”の範囲内で納得しているとおりとするならば。

この世のすべての価値、善悪、清濁、正誤、真実、正義も、自然が捏ね上げて造っただけの、刹那に縁り結ばれただけの現象でしかないとするならば。

生存への意志には逆らいようがない。

だが、もしも、世界が小生の想うものとは、違うものであるとしたら、異なる構造であつたとしたら、小生が観ているような状況、時空や物的な客観物の存在も含め、まったく違うものであつたとしたなら、生存は超越できるかもしれない。

もしも、世界が小生の想うようなものではなかったならば、生存は超越できるかも知れない。

それこそが真の不死だ。死なないことは、不死ではない。未だ死を怖れている。それは死を超越していない。真の不死は死への気遣いの滅却だ。生存の超越に他ならない」

だが、そんな人はいるのか。いない。原則そういう仕組みだから。突然変異でもない限りは。

しかし、現実には常に捉えられない、繁縷不定で多岐多様な複雑系で、真の真なる空である。全網羅的である。唐突である。